



車 16 台のゴロツキのパレード。警察も暴力団も会社のグルだ (1960-3-29 大牟田市不知火町)



トラック 1 台、貸切バス 2 台、ハイヤー 14 台のゴロツキのパレード (1960-3-29 四ツ山鉱前)



暴力団の乗り込んだバス (1960-3-29 荒尾市大島)



こん棒、鉄棒等の凶器を積んだトラック 暴徒は短刀、ピストルも (1960-3-29)



四ッ鉱南門前に車を止め、居丈高にピストルなどで脅迫 (1960-3-29)

三井三池争議は、三井三池炭鉱で発生した労働争議。大規模なものは、1953 年（昭和 28 年）と 1959 年（昭和 34 年）から翌 1960 年（昭和 35 年）にかけて発生したものの 2 回があるが、一般的に後者のみを三池争議または三池闘争と呼ぶことが多い。

◆1959 - 60 年ストライキ

1953 年のストライキ以降、経営合理化が進まない三井鉱山の経営はますます悪化していった。このため、三井鉱山は三池炭鉱からの活動家の一掃を決意し、1959 年（昭和 34 年）1 月 19 日、6000 人の希望退職を含む会社再建案を提示した。同年 8 月 29 日には 4580 人の人員削減案を発表。続いて 12 月 2 日・3 日には 1492 人に退職を勧告し、これに応じない 1278 人に対し 12 月 11 日に指名解雇を通告した。

労組側はこの措置に反発し、無期限ストに突入した。一方、会社側も経営再建の決意は固く、三池鉱山のロックアウトと組合員の坑内立ち入り禁止でこれに対抗した。財界が三井鉱山を全面的に支援した一方、日本労働組合総評議会（総評）は三池労組を全面的に支援したため、三井三池労組は「総資本対総労働の対決」などと呼ばれた。

だが、実際には三池労組は孤立していた。総評の下部組織であり全国の炭鉱労組が加盟する日本炭鉱労働組合（炭労）は、表向き総評と足並みを揃えて三池労組支持を表明したが、三井系以外の炭鉱労組の支援ストは皆無に等しく、生活費支援のためのカンパすら出し渋る有様だった。また、事務員が形成する三井鉱山社員労組連合会（三社連）は、当初より会社との妥結を優先して柔軟に立ち回り、炭鉱労組の闘争には加わら

なかった。これは、三社連組合員は会社と現場作業員の連絡役であったが、会社が炭鉱労組の意思を汲まないとすると、炭鉱労組員が三社連組合員を吊り上げたためである。また、事務採用された者はのち管理職として会社側の人間になることがある為、普段自分たちを攻撃してくる炭鉱労組員をかばってまで足並み揃えて闘争に加わる意思はなかった。

これは、ここに至るまで、日本三大財閥系の石炭鉱業会社のうち、三井鉱山のみが三池の 53 年ストの結果、思うように合理化が進まず、組合が度を超えて力を持ち攻撃的になったことが遠因だった。住友石炭鉱業（現・住友マテリアルズ）や、三菱石炭鉱業などでは、解雇人員を別のグループ企業に斡旋するなどして、比較的平和裏に合理化を進めたのだが、三井の場合、三池労組の過激化が著しいため、三井グループの別の企業から人員引受を拒否されていたのである。このような有様であったから、同業他社労組はもとより、三井鉱山の他の炭鉱労組にも三池労組と足並みをそろえようとする意思はなかった。

ストライキは長期化し、総評からのカンパ以外の収入を絶たれた組合員の生活は、次第に苦しくなっていた。生活苦に耐えかねた一部の組合員は 1960 年（昭和 35 年）3 月 17 日、第二組合（三池炭鉱新労働組合：三池新労）を結成してストライキを離脱する。これを受けて、翌 3 月 18 日に三社連は炭労を脱退し、正式にストから離脱した。

3 月 29 日にはピケを張っていた三池労組の組合員・久保清が暴力団員に刺殺される。

……Wikipedia から



こん棒、鉄棒などを手に労働歌を歌うピケ隊に殴りかかる暴力団 (1960-3-29 四ッ山鉱正門)



なぐりかかる暴徒たちと協力する会社側と第二組合員 (1960-3-29 四ッ山鉱正門)



狼のように狂った暴力団は久保清さんを殺し、多数を傷つけた (1960-3-29)



安保体制づくりの首切り合理化をたくらむ資本家… (1960-3-29)



血を見た彼らはさらに凶暴化して… (1960-3-29 四ッ山鉱正門)